

医師の立場から 現場の教育と P-drug の考え方

角南由紀子

(医)相生会 大崎クリニック

「どの薬を使うかは判っても、それをどのように使うかがわからない」というのが、研修医の一つの悩みであろう。確かに卒業までに学ぶことは多く、治療の詳細にまでは関心が及ばない。また、世の中に出回っている薬物は数多くあり、それについてすべて理解するというのはかなり困難である。さらに「使いこなす」ということになるとまず不可能とっていいだろう。各疾患の治療ガイドラインや治療に関する本を引っ引きで調べるが、それが本当に妥当なものなのかの判断はどうするのか?このような悩みを解決する大きな手助けになるのが P-drug の概念である。

P-drug の考え方を臨床研修もしくは初期研修で学ぶメリットは、大きく分けると、知識授与型ではなく問題解決型の考えに基づき論理的・実践的な薬物療法を行うことができる、薬物療法に限らず色々な場面で同様の考え方が身につく、の 2 つであると考えられる。日本では約 2,400 種類 (商品にして 17,000 種類) の薬物が市販されている。それらの薬の中から、自分が主に使用する薬をどのように選択し、どのようにガイドライン、成書及びその他の情報を利用するのか、またそれら情報のエビデンスの強さおよび推薦度をどう考えるのか、という判断ができるようになれば、前述のような悩みは解決されるであろう。また、何が問題でどう解決するのかという考え方を主体的に学習していくことにより、様々な病態を示す患者に対して柔軟に的確に対応できるようになる。

このように、P-drug の考え方は薬物療法にとどまらず、医師が臨床に携わる際の姿勢を学ぶ基本なるものであり、学んだことをシステムティックに応用するツールであり、医師を教育していく場では有用な概念と考える。